

## 菊池の松囃子

菊池の松囃子は、菊池一族の歴史における重要な出来事に遡る、600 年以上の伝統を持つ芸能である。中世の貴族が楽しんだ芸能に由来する能楽の初期型で、唄と太鼓を伴って舞う。

松囃子は、1349 年に菊池一族の城で正月の祝賀行事として初めて上演された。この時の主賓は、九州へ挙兵のために派遣された皇子、懷良（かねなが）親王（菊池以外では「かねよし」と読む；1329-1383）であった。

この時代、朝廷は権力争いの結果二つに分裂し、対立する北朝と南朝が天下の覇権を争っていた。南朝の後醍醐天皇（1288～1339）の息子である懷良は、菊池一族と同盟を結んだ。その後約 10 年間で、彼らの勢力は九州全域を南朝の支配下に置き、菊池氏の黄金時代が到来した。

菊池氏の台頭は長くは続かなかったが、松囃子の伝統は今日までほとんど変わることなく続いている。毎年 10 月 13 日、菊池神社の秋の大祭の一環として、地元の保存会によって菊池市中心部の伝統的な舞台上、懷良親王が目撃した芸能が再現される。

菊池の松囃子が無形民俗文化財に選択されているのは、1300 年代後半から 1400 年代半ばにかけて観阿弥と世阿弥によって確立された能の古典的な形式よりも前の要素を例証しているためでもある。